

6: 53-74.

Pearsall, W. H. 1920. The aquatic vegetation of the English lakes. *J. Ecol.* 8: 163-201.

Polunin, O. & Walters, M. 1985. A guide to the vegetation of Britain and Europe. Ox-

ford University Press, New York.

Smidt, J. T. de. 1977. Heathland vegetation in the Netherlands. *Phytocoenologia* 4: 258-316.

第55号(1995年4月)の訂正

11ページ左, 上から8~9行目

「ハリイ, ヒナザサ, ヒメホタルイなどの一年生の植物」
→「ハリイ, ヒナザサなどの一年生の植物やヒメホタルイ」

11ページ右, 表2の表題

「池1の一年生草本群落」→「池1の泥地の草本群落」

○橋川次郎著『なぜたくさん生物がいるのか?』(岩波書店, 1995年9月, 154p, 1,300円)

生物の多様性という、普通、種の多様性のことを考えがちであるが、生命の持つ多様性は、種内、群集、生態系のあらゆる段階で見られるものである。著者はこのような多様性を、生命の本質に関わる特徴としてとらえており、自然界が多様であることによって、生物界の秩序が保たれているとしている。

自然状態におかれた生物集団は、一般的に単純化よりは複雑化、多様化の方向へ向かっていることが具体的に多数の例をあげて説明されている。そして、生命の多様性は進化の賜物であり、長い時間をかけて作り上げられてきた地球の財産であることを教えてくれる。

水草に関するものとしては、多様性に富んだ場所の一つとして、マングローブ林のことが書かれている。マングローブは全く役立たない環境としてとらえられることもあったが、マングローブの高い生産性は浅海の生態系を支えており、そこに住む生物の多様性を維持するのに欠くことのできないものであることが明らかになってきているという。

ところで進化の原因としては、競争による淘汰という

考え方が、一般に広く受け入れられている。もしもこれが本当であるならば、競争の激化は多様性の減少につながるはずである。多様性を競争だけでは説明できないとすれば、一体、多様化の原動力とは何であったのだろうか。この点について著者は、生物の特殊化は、遺伝子の変異と個体の生存のための「努力」が生んだ、生活の「知恵」ともいうべきものであろう、としている。著者のいう生物の「努力」や「知恵」の実態とはどのようなものであったのかは、今後遺伝子レベルなどからの解析を通して、実証的に解明されていくものと思われる。

多様性を守るためには一体何をしていたらいいのかについても、示唆に富んだ言及をしている。なお、国際的な経済機構であるガット(GATT)は1995年に世界貿易機関(WTO)を発足させて、そこに自由貿易の障害となる国内法を無効にできる国際司法権を与えたそうだ。今後、自由貿易を損なうような自然保護の対策は、WTOによって無効にされる可能性が十分あるということである。開発に伴う問題については、国際的な取り決めがどのようにになっていくかについて、広く視野を世界に向けて、常に注視していくことが必要であると思われる。

著者の専門は動物生態学であり、メジロの分散と進化についての内容などはごく最近のことでもあるので、大変興味深い。また、オーストラリアで熱帯雨林共同研究センターの所長としても活躍中で、植物と動物との関係などにも触れている。この本は「地球を丸ごと考える」シリーズの1冊であるが、コンパクトな本で新しい成果も盛り込まれており、わかりやすく記述してあるので、読み甲斐のある本であった。

(田中俊雄)